

令和五年度

龍谷大学付属

平安中学校入学試験問題

受験番号

# 国語

## 解答上の注意

- 一. この問題用紙は「はじめ」の合図があるまで開いてはいけません。
- 二. 答えはすべて解答用紙の決められたところに書きなさい。
- 三. 解答用紙の決められたところに受験番号を書きなさい。氏名を書いてはいけません。
- 四. 問題を読むときに、声を出してはいけません。
- 五. 問題内容についての質問は受けません。
- 六. 印刷が読みにくいときは手をあげて監督者を呼びなさい。
- 七. 「やめ」の合図があったら解答用紙をおもて向け、問題用紙を解答用紙の上に置いて、回収が終わるまで席を離れてはいけません。（問題を持ち帰ることができません）

□ 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

宇宙を研究するようになって、もう二五年近くになります。この間、①いつも何かに追われており、たえず自分は不十分だ、という気分をもち続けてきました。おそらく、すべての研究者が同じように感じていると思います。時間をかければかけるほど、より多く論文が読め、より多く計算でき、より多く実験ができる。だから、自分の努力に比例して知識が蓄積され、研究業績として現れてくるはずだ、という強迫感をもってしまうからです。だから、少しでも自分が怠けていると感じると、気分が安定しないのです。

A、時間を長くかけるだけが、いい仕事の条件ではありません。むしろ、ときには休んだり、遊んだり、お酒を飲んだりした方が、気分転換になり、より新鮮に課題に打ち込めるでしょう。研究だけでなく、勉強でも、トレーニングでも、またどんな仕事でも同じことですね。新しいアイデアを考えたり、問題の攻め方を構想するときには、過去の試みを探ってみたり、直面する課題から少しわきに退いて見つめ直すということも重要な要素です。

私の友人には、まったく異なる課題をいつも二つかかえていて、一方が行き詰まれば他方に移り、それが行き詰まると元の課題に戻るといふ、私にはとうてい不可能なことを実行している人がいます。もっぱらマンガを読んだり、パチンコに凝ったり、山に登ったり、とさまざまな方法でリフレッシュしている友人もいます。私の場合は、昔から本好きなので、読書を気分転換の方法にしています。小説や随筆、※ノンフィクション、そして生物や地球に関する本など専門とは直接関係しない科学ものも読んでいます（現在は、読むだけでなく、本や雑誌の原稿

を書いたりもしていますが）。

ところで、科学という仕事は、本質的に「積み上げ」式だといえるでしょう。過去の研究者の成果をもとにして、それを深め・発展させていくわけです。だから、科学の業績は常に新しい仕事に乗り越えられていく運命にあります。よほど優れた業績以外は、名前も研究成果そのものも、やがて忘れられてしまうのです。それがふつうの研究者であり、そんな研究者がほとんどです。かく言う私もその一人で、私の仕事で後世に残るものは何もないでしょう。それは空しいようですが、②科学という仕事の宿命なのです。

そうと知りながら、あえて研究を続けるのは、どんな小さなことでも、自分が世界で初めて発見した（大げさですが）ことへの喜びがあるからです。IやIIが世界初をめざすのと共通した心理です。また、自分の頭の中に自然の一部が根つき、そこで自分だけが知っている世界を展開させることができると、頭の中で自由に自然の絵を描いたり、新しい進化のシナリオを書いたりすることに喜びを見つけています。この感覚は、IIIと似ているかもしれません。研究業績という結果を気にする前に、向かっている課題や謎と格闘する楽しみもあります。それは、鍵のない※錠前を開けようと苦闘する鍵屋さんに似ています。B、研究という仕事は、いろんな場面で自分自身を表現する仕事といえるでしょう。

宇宙の研究という仕事を続けながら、③私は隣接する他の科学の分野にも興味をもち、なるべく第一線の研究に接するように努めています。といっても、論文を読むのではなく、科学雑誌に掲載された解説や新書（この※ジュニア新書もそうです）を読むのです。そんな本には、わかりやすい図が描かれているし、あまり細かなことに立ち入らずに本質的なことが書かれて

いるからです。

そのような本を読むのは、むろん科学の最新情報を知りたいためでもあります。その分野の考え方や調べ方を学びたいということも理由の一つです。科学の構造は、どの分野でも本質的に同じなのです。私は、科学の構造を

ある自然現象―背後にある物質の運動―運動を支配する法則―法則を貫く原理(あるいは仮説)

というつながりと考えています。もっと単純化すれば、「現象―物質の運動―法則」でしょうか。このつながりを注意深くたどるにより、何がわかっているか、何がわかっていないか、何が今の緊急の問題なのか、おぼろげながら把握できるからです。特に、最先端で研究が活発に行われている課題ほど、問題点が明確で、さまざまな議論がなされています。そこに少しの間だけ自分も入って、アレコレ考えてみるのです。むろん、その分野で研究ができるわけではありませんが、どのようなアプローチがおもしろそうかという意見はもつことができます。つまり、他の分野の人と研究の進め方について議論ができるのです。

将棋や囲碁の勝負を脇から見ていて、横から口を出すのに似ていますね。ただし、この場合、基本ルール(駒の動かし方)と定石(手順の法則)を知っていなければ口が出せません。これと同じで、他の科学の分野に興味を持つためには、その分野の基本的な原理や法則を知っている必要があります。幸いなことに、科学である限り、どの分野でも考え方や攻め方は共通しています。④科学は一定の構造をもっているのです(くわしくは第二章で述べます)。いったんその構造を把握すると、研究課題の理解は簡単になります。基礎知識の不足はあっても、

おおまかな研究動向がわかり、何が研究課題の急所であるかを予測できるようになるからです。

地震が起きると地震のメカニズム、原子炉が事故を起こしたら原子炉の構造、核実験があれば核爆弾のしくみ、飛行機が墜落したら飛行の原理を調べてみる、そうすることによって、個々の事件について自分なりの意見がもてるようになります。自分の専門だけに閉じ込められず、科学(あるいは技術)に関連した話題についても意見を述べ、必要な批判をする、それは科学の構造を把握した人間の義務ではないかと思っています。

実は、今述べた⑤科学の構造は、自然だけでなく人間の行為―歴史や経済や政治や社会における現象―にも適用できると私は考えています。むろん、自然と人間の行為とは決定的に異なっています。自然は物理法則のもとに決まった運動をしますが、人間には感情があり、きまぐれ・反抗・同情・愛・恨みなどから、ある決まった法則通りには行動しないからです。損とわかっていて不利になるよう動いたり、先入観や偏見で判断を誤ったりするので、人間の行動にすべて同じ原理(有利になる、得をする、正常に判断する)が適用できるとは限りません。推理小説では、このような原理が適用できるといふ合意が成り立っていて犯人にたどりつくのですが、世の中推理小説のようにはいかず、したがって迷宮入り事件も多いのです。

人間がかかわる個々の特殊な事件を見る限り法則性などないようにも見えますが、歴史的に長い時間で見たり、数多くの事例を集めてくると、社会や歴史に一定の法則性が見えてきます。個々の人間はきまぐれでも、※大局的には理性的に行動し、最終的には「幸福」のためとか「有利」になるための行動をとっているのです。個人でなく集団(国、地域、学校、会社など)となれば、その度合いはよりいっそう強まるでしょう。集団を

維持するといふ原理が、個人の感情より優先されるからです。だから、社会や経済の動きも、どのような原理のもとに、どのような行動（運動）をとったか、それはどのような結果（現象）になったか、というつながりの中で理解できると考えています。

つまり、「文科系」の分野の現象といえども、自然科学と共通の構造——「原理—運動—現象」——をもっていると思うのです。だから、大学ではそれらの学問を社会科学とか人文科学と呼んでいます。この構造さえ見抜くことができれば、社会や歴史を体系として理解できるだろう。そう考えて、私はこれらの分野の本も読むことにしています。そして、「理科系」の立場から意見を出せるのではないかと思っています。

あえて、「理科系の立場から」と言ったのは、文科系の学問の場合にも構造をとらえることの大切さと、その構造そのものの変化を押さえること、そして問題に応じて原理や法則に適用限界があることを強調したいからです。自然科学の場合、原理や法則は、最終的には自然の現象によって実証される必要があります。反証された（現象と矛盾する）場合、原理や法則は変更されなければなりません。

ところが、社会科学や人文科学の場合、実証も反証もされないことが多く、自分は「こう思う」とか「こう信じる」という話で終わってしまうことが多いのです。そのような場合、いくら議論しても決着が付きません。それが \* のですが、必要なのは、決着がつく問題とつかない問題をきちんと見わけることです。私は、そのような観点で、社会の問題にも広く目配りをしていきたいと考えています。

（池内了 『科学の考え方・学び方』）

※（文中のことばの意味）

ノンフィクション …… 事実に基づいた作品。

錠前 …… 戸などにとりつけて、開かないようにする金具。

ジュニア新書 …… この文章は岩波ジュニア新書に収録。

アプローチ …… 学問研究において、対象にせまること。

第二章 …… この文章は第一章から引用。

迷宮入り …… 事件の真相や犯人がまったくわからず、解決

の見込みがたたないこと。

大局的 …… 全体を広く見回す様子。

矛盾 …… つじつまの合わないこと。

問 1

A・B

しいものを次の中から一つずつ選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア また イ しかし ウ さらに エ つまり

問2 ———線①「いつも何かに追われており、たえず自分は

不十分だ、という気分をもち続けてきました」とありますが、  
が、どういうことですか。最もふさわしいものを次の中から  
一つ選び、記号で答えなさい。

ア 研究に向かい合う時間が減れば減るほど、自分の研究業  
績が他人に奪うばわれてしまったような感覚におそわれること  
がよくあるということ。

イ 研究を進めれば進めるほど課題が明確になり、よりたく  
さんの研究を重ねる必要があるため常に時間が足りていな  
いということ。

ウ 一生懸命いっしょうけんめいに研究に取り組む他の研究者たちと競きい合う中  
で、自分だけが何もしていないというしろめたさを常に  
感じるということ。

エ 研究者たちは研究にかけた時間と成果が比例すると思っ  
ており、よりいっそう時間をかけなければならないという  
気持ちがあるということ。

問3 ———線②「科学という仕事の宿命」とありますが、ど

のようなことですか。「こと」につながるように、文中か  
ら十七字でぬき出しなさい。

問4 I・II・IIIにあてはまることばの組み合わせ

せとして、最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記  
号で答えなさい。

ア	I 冒険家 <small>ぼうけんか</small>	II 登山家	III 芸術家
イ	I 芸術家	II 天文家	III 冒険家
ウ	I 探検家	II 演出家	III 天文家
エ	I 研究家	II 演出家	III 登山家

問5 ———線③「私は隣接りんせつする他の科学の分野にも興味をも

ち、なるべく第一線の研究に接するように努めています」  
とありますが、なぜですか。その理由として**ふさわしくな  
いもの**を次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 他の科学の分野の研究者との議論に参加したいから。  
イ 他の科学の分野の最新情報を知っておきたいから。  
ウ 他の科学の分野の細かな知識まで持っておきたいから。  
エ 他の科学の分野の考え方や調べ方を学びたいから。

問6 ———線④「科学は一定の構造をもっているのです」と

ありますが、「科学の構造」とはどのようなものですか。  
文中から十一字でぬき出しなさい。句読点なども字数に数  
えます。

問7

——線⑤「科学の構造は、自然だけでなく人間の行為——歴史や経済や政治や社会における現象——にも適用できる」とありますが、なぜですか。最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 人間の行為においても、個人より集団を優先するので自然のように一定の法則性が成り立つから。
- イ 人間の行為は感情に基づくため、自然と同じように不合理的な行動をとることもあるから。
- ウ 人間の行為を分析すると、自然と全く同じように機械的に生存する道を選んできているから。
- エ 人間の行為と自然を比べたとき、人間の方がより集団的な意識を強く持っているから。

問8

□ \* □ にあてはまることばとして最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 本当の「社会」と呼ぶにふさわしい
- イ 本当に「社会」と呼べるのか疑わしい
- ウ 本当の「科学」と呼ぶにふさわしい
- エ 本当に「科学」と呼べるのか疑わしい

問9 本文の内容に合うものを次の中から二つ選び、それぞれ

記号で答えなさい。

- ア 研究課題を解決したときは、その課題と向き合い続けるのではなくときには違う見方をすることも大切である。
- イ 最先端の科学は研究者たちが競って取り組むので、課題の解決が早い傾向にある。
- ウ 科学の構造を理解している人は、自分の専門分野だけでなく他分野にも積極的に関わるべきである。
- エ 推理小説が成り立つのは、登場人物が自分の感情のままに動くことを前提としているからである。
- オ 文科系の人は理科系の考え方を取り入れることはできないが、その逆は可能である。

二 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

小学三年生の「ぼく(瑛介)」は、血液の病気で一か月以上入院しているが退院のめどはまだ立っていない。そこに同い年の壮太が低身長せうたの検査入院のためにこの病院にやって来た。三園みそのさんはこの病院のスタッフである。

「瑛ちゃんって、何の病気なの？」

「ぼくの病気？」

何の病気か。入院しているのだから、聞かれてもいいはずの質問だけど、ずばりと聞かれたのは初めてで、ぼくは戸惑った。

「あれ？ ダメな質問？」

壮太は窺うかがうように、三園さんの顔を見た。

「いいんじゃない？ たぶん、大丈夫ー」

三園さんは適当に言って、「こんなのもあるよー」と小さい女の子のほうに行ってしまった。

「あ、じゃあ、俺おれから言うわ。見たらわかるだろうけど、低身長。今、一一七センチ、ついでに※マイナス2・8SDで、九歳にして六歳の平均身長。成長ホルモン分泌ぶんびつの検査で五回目の入院でございまーす」

壮太がふざけた口調で言うから、ややこしい数字も深刻な現状もなんとなくおもしろく感じてしまう。

「そうなんだ。えっとぼくは、そうだな、血小板っていうのが少ない病気。検査は終わって、今は薬で治療しながら血小板の値が安定するのを待ってる」

自分で言ってみて、簡単に説明できるもんなんだと驚いた。検査をしまくったこと、病院を転々としたこと、長い長い時間。それらを伝えるのは難しいと思ったけれど、病気についての説

明はたやすくできた。

「おお、そうなんだ。お互い、何かが少なくて苦労してるってことだな」

「でも、身長は低くても死ぬことはないし、そこまで困ることないだろう」

壮太におおざっぱに同じだとくくられ、<sup>①</sup> ぼくはちよつと不服だった。

「死なないけど困りまくるよ。ちよつとだけ小さいっていうならまだいいけど、俺、かなりのチビだから。幼稚園の時とか、制服合うのなかったし。小学校入っても二年まで、うんていとか手が届かなかつたし、道歩いてても幼稚園児と間違われる」

「そうなんだ」

「そう。それに、もうチビ確定でさ。治療したところで、画期的に伸びる見込みはないから、将来モテるかどうか……。もう絶望」

壮太はそう言うと、

「瑛ちゃんは治るだろう？ 治れば、チビでもないし、手の届かないものもないだろう？」

とぼくの顔を見た。

「そうだね……」

ぼくの身長は真ん中より少し高い。年下に間違われたこともなければ、手の届かない遊具もない。早くここから出たい。それだけで、将来の自分に絶望はしていない。

「個性だ個性だ、って言われるけど、チビはしんどいぜー」

「そんなことないだろうけど」

「ありあり。親もそれをわかってるから、俺に<sup>②</sup> 習い事をいっぱいさせて。水泳に体操に公文。それくらいやって、背を補わないといけないって思ってたんだろうな」

「でもさ、壮太は明日には家に帰れるじゃん」

「そうだな。瑛ちゃん、二泊三日じゃないもん」

「うん」

「じゃあ、同じだけ、不幸ってことにしよう」

壮太はそう言って、「イエーイ」とぼくにハイタッチをした。  
きた。

「不幸でイエーイなんだ」

「何でも一緒だとうれしいじゃん」

「悪いことでも？」

「そう。宿題忘れた時とか、自分だけだとビビるけど、仲間見つけたらイエーイってなるだろう？」

「あるある。それはイエーイだ」

「ということは、俺たちは不幸仲間デー」

「イエーイ」

③ ぼくと壮太は二回目のハイタッチをして笑った。

( 中略 )

「今日はどうちがおみそれか、世界一気味悪い生き物作ろうぜ」

と、壮太は真ん中のテーブル前に座り、かばんから粘土を出した。

「粘土なんか持ってきたんだ」

病院では見ないおもちゃだ。小さい子が持ってきているのも見たことがない。

「うちのお母さんさ、スポーツと勉強の次は図工をやらせるわけ。絵画教室に行かされるのは逃げられたけど、小さい時から絵ばっか描かされてた」

と壮太は④ 顔をしかめた。

「まあ、ぼくも絵は好きだけどさ」

「いやになるよ。運動に勉強、そんでもって図工。そこまでしてなんとか補わないといけないほど、俺の背は小さいのかな…、ってめっちゃ小さいわっ」

壮太は一人でそう言ってゲラゲラ笑った。

「小さくてもいいじゃん」

④ そう言おうとしてやめにした。「背が低いくらいいたいこととはない」そう言える相手は、そのうち大きくなる可能性のある子どもだけかもしれない。ここに検査入院に来る子たちの身長は、ずば抜けて低く、治療なしでは将来大きくなる可能性はほとんどないらしい。

「よし、準備完了」

壮太は大きなテーブルの上に、粘土板を出し、粘土を広げた。

「絵は嫌いでも、粘土は好きなんだ？」

さっそくはじめようとしている壮太にぼくは聞いた。

「いや、⑤ 粘土は超超つまらないって思うよ」

「でもやるの？」

「うん。ゲームやベイブレードはいつもおもしろいけど、粘土はめっちゃ気の合うやつとやる時だけ、すげーおもしろくなるからさ」

「そうなの？」

「そうそう。半分瑛ちゃんの」

壮太はぼくの前に粘土の塊を置いた。

「この粘土で気持ち悪い生き物を作ったほうが勝ちな。三園さん、後でジャッジお願い」

壮太が言うと、三園さんは、

「任せておいて」

と腕を掲げて笑った。

気の合うやつとやるとすぐおもしろくなる。だったら、壮太が笑い転げるくらい気持ち悪い生き物を作らないと。ぼくは必死で粘土をこねた。

途中一回、壮太の採血があつて、その時は「瑛ちゃんも休みだぜー」とぼくも休憩させられた。だんだん粘土が形作られてくると、女の子たちが、「お兄ちゃん、がんばれー」と応援してくれるようになった。女の子たちも、病院で過ごす時間に飽きてきているから、少し変わったことを目にする、わくわくするのだろう。

「ちよつと、どうして二人とも瑛ちゃんの味方すんだよー。俺、二人と同じ低身長仲間なのに」

壮太が女の子たちに膨れた顔を見せた。

「ぼくはこの病院長いんだよー。だからここのことなんでも知ってるよ」

ぼくも負けじと女の子にアピールする。

「同じ病気の先輩か、病院生活の先輩か。どっち応援する？」

壮太に迫られ、二人の女の子は、

「どっちもがんばれー」

「どっちも負けるなー」

と声援を変えてくれた。三、四歳の子どもに気を遣わせるなんて。ぼくは「ありがとう」と言わずにはいられなかった。

「よーし、できた！」

壮太が作ったのは、しつぽと首が妙に長いキリンのような蛇のような不気味な生き物だ。バランスの悪さがなんとも言えない。

「瑛ちゃん、まだ？」

「ちよつと待って。これでよし」

ぼくは口がでかくて、長い歯が三本飛び出た、足が八本のタ

コのような生き物を作った。自分で見ても、ものすごく奇妙だ。

「おー、瑛ちゃん怖いじゃん」

「壮太のもの」

お互いに見せ合って、「マジ怖い」「こんな出てきたら速攻逃げるな」「やめてくれー。夢に見そうだ」と二人でおおげさに震えて笑った。

「三園さん、どっち」

ぼくらは三園さんに判定を任せた。

「どれどれ」

三園さんはぼくらの作品をじつと見比べた。女の子たちは、勝敗には興味がないようで、もうこっちには見向きもせず隅でお店屋さんごっこを始めている。

ただの粘土だ。だけど、ぼくは⑩息をのんで三園さんの判定を待った。最近誰とも競い合っていない。勝つことも負けることもとも遠のいている。ドキドキして何かを待つ瞬間は久しぶりだ。

「そうだね、こつちかな」

三園さんはぼくが作った粘土を指した。

「本当に？」

「うん、どっちも気味悪くて絶対見たくない生き物だけど、こちの方が顔が怖いもんね」

三園さんがそう言ってくれたので、

「うわ、やった」

とぼくは思わず叫んだ。

「瑛ちゃん、やるじゃん」

「だろ？ 不気味な生き物凶鑑持つてるからなー」

「やられたな。おめでとう瑛ちゃん」

「ありがとう」

「よし、次何する？」

「そうだな。ぼく、ベイブレード持ってくるよ」

「よっしゃ。じゃあ、俺、粘土片付けておく」

粘土の次はベイブレード。昨日までは何もすることがないことに、一日の長さに、ぼくは⑥途方に暮れていた。それなのに、今はやりたいことが次々とある。

それから午前中は、ベイブレードをして過ごした。いつもは何度時計を見ても進んでくれない時間が、壮太といると一瞬間で過ぎる。まだまだ遊んでいたいのに、昼ごはんの放送が流れた。

「またな」

「ああ、また」

ぼくたちはそう言って、プレイルーム前で別れた。

( 中略 )

「壮太、明日には帰れるね」

「ああ。でも、なんか転校する気分だ」

「元の場所に戻るだけじゃん」

「まあね。でも、二日もいたら、離れたくなくなるよな」

「病院なの？」

「そ。病院でも瑛ちゃんいるしさ」

「なんだよそれ。でもさ、背、伸びるように、治療できるといいいな」

ぼくは本心でそう言った。

「無理無理。お母さんが必死なだけで、もう駄目に決まってるよ。今から治療したって、どうせ手遅れだしさ」

「そうかな」

「もう俺、小学三年生だよ。可能性がないこと願ってるより、

⑥この身長で生きていく方法考えないとき」

壮太はぼくより背は低いけど、うんと大人びて感じる。

「この身長で生きていく方法って？」

「勉強やスポーツなんかたいして救ってくれないだろう？ おもしろくて楽しくなんないとな。チビだってみんなにバカにされる前に、チビで愉快なやつだって思わせないとき」

「たいへんそうだな」

「そう。チビはたいへんなのよ」

「だけど、本当楽しいよ。壮太」

「そ？」

「うん。めちゃくちゃ楽しい」

「ありがと」

夕飯の放送が流れ、ぼくらは「また明日な」とプレイルーム前で別れた。

「また明日」この言葉を言うのは、今日で終わりだ。明日があるのは今日だけ。⑦そんな厳しい現実があることを、ぼくは初めて思い知った気がする。

( 瀬尾まいこ 『夏の体温』 )

※ (文中のことばの意味)

マイナス2・8SD : SDスコアといって、同年齢の子

どもと比較して、どれくらい身長が

低いかを数値であらわしたもの。

ベイブレード : コマのおもちや。



問4

——線③「ぼくと壮太は二回目のハイタッチをして笑った」とありますが、この時の「ぼく」の気持ちはどのようなものですか。最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 最初は壮太の方がつらいと言われたことに不服だったが、同じようにつらいと言われ、やっと自分のつらさも理解してもらえたと安心した。

イ 最初は壮太と同類あつかいをされたことに違和感があったが、つらいことをかかえているという共通点があることで、仲間だと言われたことに納得をした。

ウ 最初は壮太と自分がおおざっぱに同じだとくくられたことに納得がいかなかったが、一度ハイタッチをしたことで、壮太の明るさに答えたいという気持ちが芽生えた。

エ 最初は壮太がたくさんの習い事を自慢しているようで良い気はしなかったが、自分たちは一緒だと言われたことで、仲間になれてうれしい気持ちになった。

問5

——線④「そう言おうとしてやめた」とありますが、なぜですか。その理由を「から」につながるように、文中から二十三字でぬき出し、はじめと終わりの五字で答えなさい。

問6

——線⑤「粘土は超超つまらないって思うよ」とありますが、壮太が「つまらない」ことをしようとするのはなぜですか。その理由を「から」につながるように、文中から二十字でぬき出しなさい。

問7

——線⑥「この身長で生きていく方法」とありますが、それはどのようなことですか。文中のことばを使って十五字以内で答えなさい。

問8

——線⑦「そんな厳しい現実」の原因となる、明日起こるはずのことはどのようなことですか。六字以内で答えなさい。

問9

「ぼく」の入院生活は、壮太が入院してくる前と後ではどのように変化しましたか。最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 自分よりつらい立場の友人と過ごすことで、自分が病気になることを忘れて心から楽しんで遊ぶようになった。

イ 時を忘れて遊んだりドキドキして何かを待ったりすることで、一瞬で時間が過ぎるようになった。

ウ 同級生と競い合って勝つことで、自分の可能性を信じることができるようになった。

エ 長期間友と過ごしけんかもしたが一緒に遊ぶことで、人のつらさを理解し思いやりを持てるようになった。

問10 文中の「ぼく」と壮太のやり取りから読み取れることとして、最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 壮太は開けっぴろげな性格で自分のことを自分からどんどん話すが、「ぼく」はそんな壮太に最初は戸惑い、壮太のことを苦手だと思うようになっていった。

イ 「ぼく」は粘土などしたくなかったが、仕方なく始めたところ夢中になってしまい、そういう遊びの提案ができる壮太に一目置くようになった。

ウ 壮太が主導権を持って遊んでいるが、二人ともがお互いと一緒にいると楽しいと感じており、「ぼく」は壮太との時間をかけがえのないものだと感じている。

エ 「ぼく」の気持ちで会話以外で語られることはないが、心から壮太との時間を楽しみ、この時間が無くなってしまうと願っている。

三 次の文の——線のことばとほぼ同じ意味の慣用句として、最もふさわしいものをあとから一つずつ選び、それぞれ記号で答えなさい。

- ① 過去の失敗をなかつたことにする。
  - ② 強い人を相手にすると、すぐに降参する。
  - ③ 今日は試験の本番なので、気持ちを引きしめる。
  - ④ 兄は今までの努力を全てむだにするような行動をとった。
  - ⑤ 姉のいる場所を聞かれたが、知らないふりをする。
- ア かぶとを脱ぐ
- イ えりを正す
- ウ しらを切る
- エ 水に流す
- オ 棒にふる

四 次の——線のカタカナは漢字に直し、漢字は読みを答えなさい。

- ① 解答用紙のマイスウを数える。
- ② 運動会でショウガイブツ競走に参加する。
- ③ サイバンに出て証言する。
- ④ 答えのアヤマリを訂正する。
- ⑤ 太陽デンチの研究をする。
- ⑥ 養蚕業が発展した時代。
- ⑦ 遠くで汽笛の音がする。
- ⑧ もしもの時のために備える。
- ⑨ 生命の尊厳を守る。
- ⑩ 会議で挙手をする。

これで問題は終わりです。